

交換留学の意義の変容と異文化適応プロセス¹

－在日留学生のケース分析から－

奥村圭子

要 旨

本稿では、欧米圏からの交換留学生在が個人としてどのような意義を留学に感じ、どのように異文化経験を解釈し、日常的な問題や心理的な問題に対応し、異文化適応しているのか、その異文化を受容していくプロセスをPAC分析という手法を用いて検討した。語学力の向上を目指し、物理的な困難さや心理的な困難さを乗り越えて「自立すること」を留学の意義と考える初期段階、そして「違い」に慣れず、人々の考え方、態度、人間関係に戸惑い、躓く留学半ばの段階を経て、帰国前の段階では心を開き、自文化や自分との「違い」を受入れ、自分も「変わる」ことが自己成長には必要だと気づく認知の変容のみならず、態度・行動レベルの適応も確認された。これらの適応には、さまざまな個人的な要因も促進要因や遅滞要因として大きく関わっており、短期とも言われる10か月余りの交換留学においても、Berry (1997) が示す「文化変容態度」における「統合」的態度が形成されていた。

キーワード：交換留学、受入れ・派遣、異文化適応、PAC分析

1. 研究の背景

世界を舞台にして活躍できる国際感覚を持ったグローバル人材の育成が社会や企業から求められている昨今、2008年7月に文部科学省ほか関係省庁で策定された「留学生30万人計画」骨子では、交換留学等を含む学生交流の推進方針も打ち出され、各高等教育機関では、教育システムの国際化への取り組みが活発に行われるようになった。2016年度文科省高等教育局が推進する留学支援においても、高等教育機関等の双方向交流の推進が主要項目として掲げられており（文部科学省2016）、大学間交流協定等に基づく海外の協定大学との短期留学の派遣と受入れにも力が注がれている。本学でも小規模ではあるが、協定大学間で毎年15名ほどの規模の学生交換を行っている。多様性を尊重した活気のあるキャンパスづくりのため、日本人学生・教職員と外国人留学生の相互の交流を促進する学生交換は、非常に重要な意味を持っている。しかしながら、2015年度までの時点では本学から派遣される学生にマンスリー・レポートの提出と報告会での発表を課しているのみで、プログラムの効果や意義について本格的な調査を実施してはいなかった。受入れ学生に対して本学では、到着直後にガイダンスを行うほかには、特にこれまで何も課しておらず、日頃の様子から留学の成果を推測しているのが実情であった。しかし、日本の社会や大学生活にうまく馴染んでいないケースも散見される現状がある。そこで、交換留学で派遣・受入れされる個々の学生が、留学によって、自身や自文化への見方、他者や異文化への考え方、価値観についてどのような影響を受けているか、認知や意識の変容を実証することが、今後の大学の国際化戦略の促進や大学の受入れ環境の充実、支援体制の構築のためにも必須の条件であると思われる。

¹ 本研究はJSPS科研費（基盤研究C23520667）の助成を受けたものである。

筆者は、短期交換留学生として10カ月ないし1年間、協定大学との間で派遣・受入れされた調査協力者らとともに Personal Attitude Construct 分析法（個人別態度構造分析法 以後 PAC 分析と示す）（内藤 2002）を基として、留学意義の解釈を加えながら、認知変容の分析・考察を縦断的に行う質的研究を進めている。ある程度の個人差はあるものの、その変容には共通した特徴が見られた。1）抽象度の高いイメージから徐々に具体化・明確化したイメージを持つようになっていく、2）個人が得た認識レベルであったものが、その認識を他の人や社会と共有したいという社会的な視点が加わっている、3）自文化と相手文化、または自分と相手文化の人々を観察し異なるものとしての認識から、異なっていることが当然のことで、多様なものなのだという認識が生まれたり、共通点にも着目したり変化している、4）自己への振り返りや人との関わりから、将来へのイメージが形成されるに至っている、5）言語習得は重要な目的としての認識から、コミュニケーションの障壁もしくはツールとしての認識へと変化している、などの点であった。しかしながら、これら一群に共通する異文化適応の傾向を探るだけでなく、個々人に焦点を当てたホリスティックな観点（内藤 2002: 11）に立ち、考察することも喫緊の課題であると考えられる。本稿は、現行の交換プログラムに参加し、一貫して「新たな文化を学び、自立する」ことを目指した一名の交換留学生が、どのような異文化適応プロセスを辿っていくかを、留学開始時、留学半ば、そして留学終了直前という時間軸上の留学意義のイメージの解釈を通して、ケース・スタディとして分析を行うものである。

留学生の日本社会への適応については、適応の実態、それに伴う要因、また不適応への対応まで様々な検討がなされてきた（井上 1997; 2001、葛 1999 など）が、交換留学生たちが、どのような意義を感じて留学をし、日常生活上の困難に出会いながらも、日本人と関わり日本文化を享受し、自国で培ってきた文化的アイデンティティとのバランスを取りながら自己形成していくかを縦断的に解析する研究は、あまり類を見ない。本稿ではまず、異文化適応について、そして留学生、特に在日留学生の異文化適応に関わる要因についての先行研究を簡単に概観した後、本稿の調査協力者についての調査結果の分析、考察を行いたい。

2. 先行研究

2.1 留学生の異文化適応に関連する理論的モデル

留学前の自文化と新しい他文化に対して、どのような態度で臨み、その態度がいかに変化していくか、という文化環境での適応は「異文化適応 (crosscultural adaptation)」と呼ばれてきた。Kim (1988) によると、アメリカにおいては戦前からその研究が進められており、当初は移民の文化適応の研究を中心としていた。それに加えて留学生の異文化適応研究は、英米両国を中心に第2次大戦後より行われており、異文化適応研究の中でも多くの関心が寄せられる分野であった。

「異文化適応」にはさまざまな概念がある。田中 (2000) は「心身が健康で、社会的にも良好な状態で課題達成を遂げ、異文化に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしている状態」と定義しており、個人と異文化環境との調和的關係として定義付けている。山岸 (1995) も「異文化環境で、勉学の目標を達成し、文化的・言語的な背景が異なる人々と好ましい関係を築き、個人にとって意味のある生活が可能となる状態」だとし、適応を調和のとれた状態と見ている。一方、高井 (1989) は、「個人が慣れ親しんだ社会環境から離れて、新たな環境に次第に馴染んでいく心理的な過程」と述べ、Kim (1988) は、この過程を「ストレス、適応、成長のプロセス」と見なし、さらに Kim (2001) は「移住者が異文化環境と安定した互恵的・建設的な関係を構築する過程」だともしている。また、江淵 (1991) は「異文化適応と

は、自己の内的環境との戦いであり、自己挑戦、自己変革の過程」であると捉えている。これらにおいては、個人が環境の変化のどの部分にどの程度順応できるか、どのような経過をたどって達成できるのかの過程が問題とされている。Adler (1975) は、その心理過程を5つの異文化適応段階 (phase)、つまり接触 (Contact)、自己崩壊 (Disintegration)、自己再統合 (Reintegration)、自律 (Autonomy)、そして最終の独立 (Independence) の5段階で示している。つまり、異文化適応とは「社会的、心理的及び文化的な相違を受入れ、生活を楽しみ、自らの行動を選択し、責任を果たせ、個々の異文化での存在の意義を見出すことが出来る」自律段階、及び独立段階が重要な段階としている。このAlder (1975) のモデルは、それまでOberg (1954) などが提示した、文化差に基づく葛藤や不快感、認知的不一致などを含む否定的な意味合いで捉えられていた「カルチャー・ショック」を、「新しい文化学習と個人の人間的な成長という観点から自己理解の深化とそれに伴う変容をもらたらず学習経験」だと考えている。井上 (2001) も指摘する通り、この視点は、青年期後期に異文化に身を置く留学生にとって重要な意味を持つと思われる。しかしながら、人が新たな経験をすることが全て成長に結びつくのか、変化をすることがそのまま成長と呼べるのか、それらは個々のケースについて検証を要すると言えよう。

また、異文化研究の中には、移民や難民、留学生などを受入れる側にも焦点を当て、異なる文化を持つ個人の集団に継続的かつ直接的に接触することによって、片方または両方の自文化パターンに及ぼす変化を示す「文化変容² (acculturation)」(Redfield, Linton & Herskovits 1936) という概念がある。Berry (1997) は、図1に示すように双方の文化とどのような関係を築くかについて、文化変容態度を統合 (integration)、同化 (assimilation)、分離 (separation)、周辺化 (marginalization) の四つの類型にまとめている。「統合」とは自文化を維持しつつ新しい文化も取り入れていくもの、「同化」は自文化を捨て新しい文化に適応していく方略、「分離」は自文化を保持して、新しい文化との接触を回避するものであり、「周辺化」はこれまでの文化とも新しい文化とも距離を置くというものである。

Ward (1996) や Ward & Rana-Deuba (1999) は、文化の適応の内容について「社会文化的適応」と「心理的適応」に二分し、「社会文化的適応」は個人をその新しい環境につなげる外的な心理状態、たとえば学校や家庭生活、職場などにおける日常問題に関わる適応とし、そして「心理的適応」を個人の内的な心理状態、例えばアイデンティティの問題や良好な精神状態、個人的な満足感や自尊心などを含むものとし、この心理的適応が、新しい文化環境での初期段階に深刻な問題と成り得ると述べている。また、Ward (2001) が提唱した異文化適応のABCs (Affective, Behavioral and Cognitive) では、心理的文化変容は情動的、態度・行動的、そして認知的な変化から成るとし、さらにWard, Bochner & Furnham (2005) は、異文化接触や文化変容に関する研究で応用可能な理論的モデルをまとめ、1) ストレスとコーピングの理論 (情動面)、2)

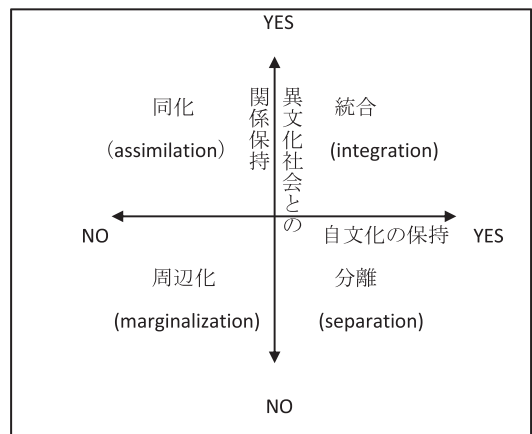


図1 文化変容方略 (Berry 1997:10)

² 本稿では Acculturation を「文化変容」(渡辺 1995) と訳すが、石井他 (1997:214) では訳語「異文化受容」を提示している。

文化学習理論（態度・行動面）、そして3）社会的アイデンティティの形成（認知面）を提示し、個人の異文化変容過程を情動面、態度・行動面、認知面の三つの側面から解明を試みている（Zhou, Jindal-Snape et al., 2008）。箕浦（1990）によると、子どもの成長プロセスで文化を学ぶとき同様、自文化では通常これらの三つの側面での変化が独自に進むのではなく緊密に結びついており、個々の行為の背後にある認知や情動を改めて意識することがないが、異文化においては認知や態度・行動面では適応していても情動的側面では受け入れられないなどのズレも生じることもあると言う。つまり、異文化適応とは、一元的な心身の変化ではなく、情動、態度・行動、認知という異なる側面においての変化として捉えるべきであろう。

2. 2 在日留学生の異文化適応に関連する要因

在日留学生の異文化適応に関する研究は、1980年代より多岐に亘っており、個人要因と環境要因とについて多く検討されている。まず、個人要因については、対日イメージ（岩男・萩原 1987；葛 1999；中野・奥西ほか 2015）や言語能力（安達 2002）、アイデンティティ（大野 2002）、留学の目的（葛 1999）、ソーシャル・スキル（湯 2004）など、個人の内的要因が適応度に与える影響について論じている。環境面については、ソーシャル・サポート・ネットワーク（田中 1998）、ソーシャル・サポート（宋・石川・神庭ほか 2006；譚・渡邊・今野 2013）、対人葛藤（新倉 2001）などの対人関係、文化距離（井上 2007）などの外的要因を関連要因として扱っている。

これらの多様な異文化適応へ影響する要因に関して、Berry（1997:15）は、文化適応のフレームワークにおいて、その適応要因を集団と個人の変数に分け、個人の変数をさらに文化変容の前から存在している影響因子（Factors prior to acculturation: FPA）と文化変容中の影響因子（Factors during acculturation: FDA）に分類して考えている。FPAには、国籍、年齢、性別、学歴、モチベーションや留学目的などの他、日本語能力、文化距離等が含まれる。一方、FDAと呼ばれる要因群には、パーソナリティ、個人的な挫折体験、コーピングの方略、文化学習、不全感、満足感などが含まれる。これらは、適応の促進要因、または遅滞要因のいずれにもなり得るものであるが、それらがWard（2001）の提唱する情動面、態度・行動面、そして認知面にどのような影響を及ぼすのかを問うこととする。

3. 研究の概要

3. 1 目的

本稿では、現行の短期交換留学プログラムを通じて日本で10カ月の留学生活を送る留学生1名（Aとする）を対象とする。留学開始時、留学半ば、留学終了直前の三段階において本人が考える留学の意義や意味についてPAC分析を行い、その間の留学に対する認知の変容を通して、異文化に対する留学生の適応過程、そして適応促進要因、遅滞要因などの分析を試みた。異文化接触が情動面、態度・行動面、認知面でどのような変化をもたらしているかを明らかにし、同時に交換留学プログラムの意義も探ることとしたい。

3. 2 対象と方法

調査協力者Aは、欧米圏の本国で日本語を副専攻として2年間学んだあと、10カ月間の交換留学生として来日した留学生である。留学前に一度旅行で日本を訪れたことがある。留学中は大学から徒歩で通える留学生用学生寮に住み、異文化交流を目的とするサークルに属し積極的に参加し、また課外で行われている英語講座の講師も依頼され、引き受けている。交換留学

生には原則として専門分野が近い日本人学生がチューターとして留学生の滞在中付き、留学開始後の諸手続きや生活面や日本語などの学習面のサポートを行っているが、Aの場合、付いたチューターが大学院修士課程2年生で半年で卒業したため、後半は新たに大学院修士課程1年生のチューターが付いていた。留学生用の寮には日本人チューターが2名常駐しているほか、交換留学生の生活や教学面での指導、相談には学部の受入れ教員と国際交流センターの教員が対応している。

手法として内藤（2002）が開発したPAC分析を用いた。PAC分析法は「テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」（内藤2002：1）で、丸山・小澤（2007）が示すように以下のような特徴がある。1）PAC分析は、調査協力者主体の調査であること。通常のアンケートやインタビューで調査実施者が質問項目を事前に決めておいて行うものと異なり、連想刺激文を基に調査協力者の自由連想による語、フレーズ、文を出してもらうため、実施者側からの制限がない。2）連想間の類似度評定を行うこと。調査協力者が出した語、フレーズ、文のイメージ間の類似度を数値化し、この情報からデンドログラム（樹形図）を作成する。3）調査協力者がクラスター構造のイメージや解釈の報告を行うこと。上述のデンドログラムを見ながらそこに現れた調査協力者自身が挙げた語、フレーズ、文などの項目のまとめ、つまりクラスターを見ながらイメージや解釈を語る。調査実施者はその語りや語の重要順、イメージを聞きながら、調査協力者の枠組みの中で解釈を試みるものである。インタビュー調査自体は質的研究と言えるが、上述の1）と2）の点から量的な調査の側面を持っていると言える。また、末田（2001：74）は、調査協力者の報告、及び解釈はデンドログラムに基づいているため、再現性が高い点から、単独での信頼性の高さのみならず、相互関連的な信頼性も高いことを利点として挙げている。

PAC分析を用いる理由として、その全過程で調査協力者自身が語る留学に対するイメージとその解釈の言語化から、通常のアンケートやインタビュー調査では得られない調査協力者の多様な経験や感情を含む内面の構造を明らかにできる（内藤2002）点、文化適応過程を見ていく上で、調査協力者自身にとっても有益な気づきが促進できると予測できる（井上2001）点の二点が挙げられる。

調査開始前に趣旨説明を行い、調査協力者はいつでも調査を中止できること、回答を拒否することができる点を確認し、録音がされることへの承諾を取り、プライバシーと個人の権益の保護が研究発表時に最優先される点を説明した。内藤（2002）のPAC分析手順に原則的に沿い、手続きとして、1）連想刺激文の提示、2）当該テーマに関する自由連想を調査協力者がカードに記入、3）連想項目の重要順位への並び替え、4）連想項目間全ての対の類似度評定（7段階評定）、5）類似度距離行列からクラスター分析、及びデンドログラムの作成（分析ソフトはHALWIN6.24、距離関数はウォード法を使用）、6）調査協力者による各クラスターについての解釈、7）各連想項目のイメージ（+、-か±かなど）の聞き取りを行い、各クラスターのイメージやクラスター間の関連性などについて、インタビューで語ってもらった。本稿の調査では、調査協力者が最も心地よく、円滑に使える英語を媒介語として使い、また上述の1）から4）について、所要時間の短縮と調査協力者の心理的負担の軽減のために開発され、カードに書き込む作業、カードにある連想項目の重要順評定、項目間の全ての対の類似度評定作業などをPC上で行うことができる土田（2009）の「PAC-assist」というPAC分析支援ツールを使用した。1回目の留学開始時の連想刺激文は、図2の通りで、2回目留学半ばと3回目

留学終了直前においても同様に留学の意義を問う連想刺激文を用いた。

You are going to start studying abroad. You will gain various experiences from now on. What image do you have of your studying abroad? What is the meaning of studying abroad to you? Think of as many words/phrases/sentences as you like.

図2 1回目 留学開始時の連想刺激文

4. 結果

調査協力者に対して行った3回のPAC分析によって得られたデンドログラムは、図3-1～3に示す通りである。デンドログラムの余白部分に重要度の順位の数値(例 4)、連想項目(例 making new friends)、そして()内には各項目に対する調査協力者のイメージが肯定的(+)か、否定的(-)か、肯定的であるが否定的なイメージをも感じる(±)かが記されている。クラスター(CL)ごとに上からA、B、C、...とし、それぞれに調査協力者によって付けられたクラスターごとのラベルを【 】内に記している。いずれも誤りも含め、原文のまま示す。本文中の「 」は、連想項目、または調査協力者の言説からの引用を示している。以下に3つのデンドログラムを基に、各クラスターごとの解釈の抜粋とクラスター間の比較と全体について言説を調査実施者が和訳し、調査協力者に確認したものを提示する。その後、調査実施者の総合的な解釈を行う。

4.1 1回目 留学開始時の留学に対するイメージ

4.1.1 Aによる解釈

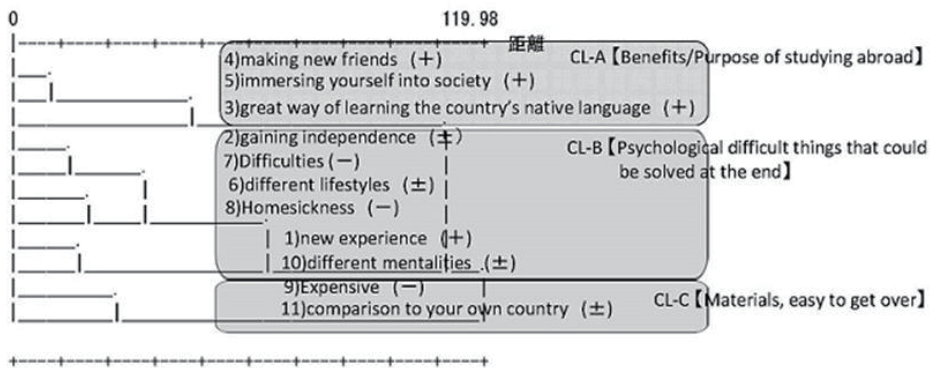


図3-1 1回目 留学開始時の留学に対するイメージ

クラスター A (CL-A) 【Benefits/Purpose of studying abroad】

making new friends (+), immersing yourself in society (+), great way of learning the country's native language (+)

「新しい友達を作る」ことはとても大切。あなたが日本語を学びたかったら、新しい、特に日本人の友達を作るのがいい。外国にいる間に友達がいるって素敵なこと。いい経験になると思う。色々な経験をするために、新しい「社会に飛び込む」。社会に入って行かなければならなければ。留学は、「その国の言語を学ぶのにいい方法」。たとえば、自国では話す、聞くといった練習はしてこなかったから、日本滞在中に、もっと早いペースで学べる。これらは、【留学の利点、目的】かな。

クラスター B (CL-B) 【Psychological difficult things that could be solved at the end】

gaining independence (±), Difficulties (－), different lifestyles (±), Homesickness (－), new experience (+), different mentalities (±)

「自立すること」はあなた自身で何でもできるということ。人に頼るよりあなた自身「独立した人間になる」ということ。留学は自分の学位のためでなくて、残りの人生に役立つ「新しい経験」で、本当に意味あることだと思う。また、いろいろな面で、自分の国は多文化社会だけど、日本はそうじゃない。色々な困難があるけれど、その「困難さ」を越えることで独立心も育つ。言語の壁や「ホームシック」だって困難さの一つ。そしてこのクラスターの他の項目も基本的にほとんど「困難さ」だと思う。日本人は私とは「異なるメンタリティ」、「異なる考えやライフスタイル」を持っているからそれに慣れていかなきゃ。何かに慣れていくって、時折大変なことだけれど、【最後には乗り越えられる心理的な困難さ】に関するクラスター。

クラスター C (CL-C) 【Materials, easy to get over】

Expensive (－), Comparison to your own country (±)

為替レートの関係で、自国では消耗品がもっと安いので、何か買うときに自国の通貨に換算したり、自国だったらこれはいくらかな、「物価が高い」など、考えて買うことがよくある。いつも「自国と比較」している。メンタリティなどについてもいつも比較してしまう。でも、これらは大きな問題じゃなくて、【簡単に克服できること】だと思う。

クラスター間の比較と全体について

CL-Aは【留学から得る物】、つまり利益となるもので、BはAのために克服しなければならないこと。CもBと同じように、Aの実現のためにも乗り越えなければならないけれど、それは簡単に早く乗り越えられる意味で、もっと肯定的。でもBにも簡単に乗り越えられるもの、たとえばホームシックなどが含まれてる。Bの項目も友達とのネットワークが形成されれば、乗り越えられるかもしれない。そうなれば肯定的に考えられるかな。

4. 1. 2 総合的解釈

1回目の留学開始時の段階では、図3-1に示されるように、連想項目は11項目で調査協力者Aは3つのクラスターに纏められると解釈した。CL-Aは、【留学の利点、目的】とも言えるクラスターで全てが肯定的イメージである。しかし、CL-Bには重要項目の3項目に「新しい経験」「自立すること」が入っている。親から離れて異国の地で自分自身で何でもこなしていくことで、独立した人間へと成長でき、それが残りの人生に役立つ新しい経験となり、将来に繋がりたいと述べている。しかしその一方、既に現実に直面している難しさ、例えば言語の壁、日本人のメンタリティや考え方、異なるライフスタイルに感じる違和感や、ホームシックなどの【最後には乗り越えられる心理的な困難さ】については中立的、または否定的なイメージを持っている。CL-Cでは、物価を高く感じたり、全てを自国のものと比較しながら生きている現実があり、これは徐々に慣れていくものだと考えている。これらの物理的な問題は【簡単に克服できること】であり、そして友人などのソーシャルサポートによって肯定的に捉えられる可能性も秘めていると判断している。CL-BそしてCL-Cの全ての問題を克服したあとに

は CL-A の目標達成が叶うと考え、重要度が高いのは、「新しい経験」「自立心を得ること」「言語を学ぶいい方法」などの項目であることから、自己成長を目指す、これからの留学生活への意欲が伝わってくる。

4. 2 2 回目 留学開始時の留学に対するイメージ

4. 2. 1 調査協力者 A による解釈

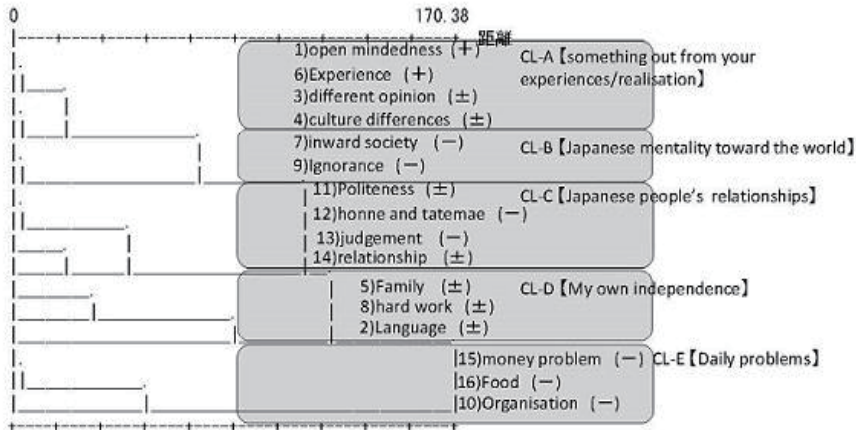


図 3-2 2 回目 留学開始時の留学に対するイメージ

クラスター A (CL-A) 【something out from your experiences/realisation】

open mindedness (+), experience (+), different opinion (±), culture differences (±)

始めは何でもが新しい経験なのだけれど、自分自身の「心を開く」と同時に「経験」となるはず。でも、日本人はほとんど心を開いてないと思う。彼らがまだ世の中のいろいろなことを経験していないからかな。他の世界の国々がどうなっているか知らないでいる。それで偏見も強いのではないかな。どうしてこれだけ人に対して偏見があるのかわからない。日本自体、何でも受入れるという風土はあまりないけれど、この地域は他のところに比べて、少し閉鎖的だと思う。自分が経験している限り、そう思う。経験について、日本に住むというのは貴重な機会なので、自分たちは出来る限りいい経験にしたいのに。そして、人は、「さまざまな意見」があるはずなのに、日本では人々は意見をあまり言わない。自分の国では、それぞれが意見を持ち、そして他の人の意見も受入れるのだけれど。これは「文化差」、そしてメンタリティの違いも感じる。【経験や気づきから得るもの】が多い。

クラスター B (CL-B) 【Japanese mentality toward the world】

inward society (-), ignorance (-)

もちろん日本人はとても丁寧だけれど、自分が見る限り、いつも「内向き」で自己中心的、そして新聞を読んだりしない。人生には多くの重要なことがあるのに。例えば世界とあなたとの関係や位置づけを知るのに、ニュースを読むことはとても重要だと思う。そしてあなた自身を理解することも本当に大切だと思う。変だと思うのは、女の子はファッションに熱心で自分のことばかり。そして日本人は旅行が好きなのに、実際社会のことをあまり知らないでしょう？ 何だか不思議。だから、次に「知らない」という言葉が来るけれど、それは世界について知らないということ。親しい日本

人に聞いても、実際自分の国で何が起きているかさえも知らない。もし自分の国や世界の他の地域についてもっと知っていたら、きっと小さなことにでも自分がなんて幸せなんだって気づくと思う。日本人は世界の他の地域について知らないから、全て、より個人的なこととして解釈し始める。それで問題が起きているような気がする。【日本人の世界に対するメンタリティ】というタイトル。

クラスター C (CL-C) 【Japanese people' s relationships】

Politeness (±), honne and tatemae (－), judgement (－), relationship (±)

日本人はとても「丁寧」で相手に対して敬意を払うのはいいこと。それは自分の国ではあまりないこと。でも、「本音と建前」が問題。ほとんどの丁寧さは建前によるもので、本音じゃない。本当は心のうちでどのように感じているかが重要でしょう？ 自分には日本人を「判断」するのが難しい。自分と「人との関係」がわからない。本当に何を感じて考えているかを知りたいから、人が言ってくれる意見は大切。それで「人との関係」は深まるでしょう。他の交換留学生とは深い話ができる。意見を言ってくれるし、特別に「本音と建前」はないし、彼らとの「関係」は深い。でも日本人はあまり自分の意見を言ってくれない。でも気がついたのは、海外に行ったことがある人の方が心を開いてくれるということ。【日本人の人間関係について】よく考える。

クラスター D (CL-D) 【My own independence】

Family (±), hard work (±), Language (±)

「家族」については、肯定的にも否定的にも成り得るイメージ。「家族」を思い出し、そしてそのありがたさを感じている。もちろん家族以外の人同士も家族のようになれると思うけれど、自国の家族の大切さも感じる。日本に来てから自分の家族のありがたさを強く感じるができる。日本での生活はなかなか大変、困難だけど、否定的じゃない。それから多くを学べると思う。交換留学生は皆それぞれ、悩みや辛いことがある。友人を作るのが難しかったり、時折「言語」が難しかったり、それまでの日本に対するイメージが大きく変わって、全く異なるものになったり。でも「困難さ」は、最後は【あなたの独立心】を育ててくれるもの。「言語」、これは、伝えようとするのが相手に伝わらなかつたりもする。でもとても面白いのは、英語を教えているクラスの人たちはディスカッションができるの。自分の意見を言うのを全く怖がらず、拙い表現であつたりするけど、心を開いて話してくれる。彼らは意識が高く、これは自分が新しい言語を学ぶ姿勢に繋がっている。

クラスター E (CL-E) 【Daily problems】

money problem (－), Food (－), Organisation (－)

自分はそれほど深刻な「お金の問題」を抱えたことはないけれど、考えて使い始めなければならないと思っている。同じ「食べもの」ばかり作っていると厭きるから、時々一緒に住んでいる寮のメンバーに新しい料理を作るの。だからってお返しは期待していないけど。「オーガナイズすること」、これは日本では物事が決められたり知らされるのが最後にバタバタだつたり、うまく管理されてない。例えば寮費を払うのもどう払ったらいいのかわからない説明なしに、いきなり未納の人のリストが貼り出されてびっくりした。日本語だつたけれど。誰もどうすべきか言わない。リサイクルなどもそう。また、寮には決まりがあるけれど、皆なかなかその通りにしない。手伝っているのは自分だけ。自分は寮のこと、とても気になって、いつもきれいに使いたいのになんか誰かが汚し、また

汚くなる。「オーガナイズすること」の欠如が問題を起して、これらは全て【日常的な問題】。

クラスター間の比較と全体について

CL-A【経験や気づきから得るもの】は経験から学んであなた自身が認識、実感すること。CL-B【内向き社会】はあなたが日本人について認識、実感したこと。かなり状況が悪いところに来たとしても、それから多くを学ぶことができると思う。そしてCL-C【日本人の人間関係について】は、日本人と付き合うときにはこれを知っていると理解しやすい特徴。日本人を変えようとは思わないし、それはできないけれど、彼らと寛容に接するために理解しておく必要がある。彼らのものの考え方を知っておくと違う形で接することができて、CL-AやBについて認識があれば、CL-Cは理解しやすい。CL-D【あなたの独立心】は、あなたの自立へと促進するもので自国での生活と将来をつなぐもの、CL-E【日常的な問題】は、CL-A、B、Cとはそれほど関連性がないけれど、CL-DとEの間には関連性がある、将来につながるもので人としての成長に関わっている。「オーガナイズすること」は関連はなさそうに見えるけど、日常の様々なことを観察や経験することで得ることがある。全体的には、肯定的なものもあれば否定的な項目もあって、それはどの国に行っても同じだと思うけれど、日本は自分の国とは国も人々のメンタリティもかなり異なる。自国では体験できないことをこの1年で体験することがあなたを賢い人間にしてくれると思う。今、日本人との関係がそううまくいっていないから、残り半分の留学生活、頑張りたかって今実感してる。前に進まなきゃ。

4. 2. 2 総合的解釈

2回目留学半ばの段階の連想項目は16項目へと大幅に増え、CL-A以外の全てのクラスターは、中立的、もしくは否定的なイメージで占められている。重要度から見るとその上位は1)心を開くこと、2)言語、3)異なる意見、の順である。「心を開くこと」のみが肯定的なイメージであり、日本人にそうあってほしいという意味を込めたと言っていた。「心を開くこと」「経験」「異なる意見」そして「文化の差」がCL-Aに属し、【経験や気づきから得るもの】というタイトルが付けられている。ほかの協定大学からの留学生とのコミュニケーションと比較して、日本人とのコミュニケーションの中で感じる違和感に激しい葛藤を感じ、時折、感情を抑えきれぬ様子であった。留学開始当初その習得が留学の目的となっていた「言語」も、障壁として登場している。「異なる意見」は、日本人が意見らしい意見を持っていないことについてで、さまざまな意見の交換を自分はしたいのに全くできないことをストレスと感じている。本人が全体を解釈しているように、日本での留学生活について肯定的なイメージと否定的なイメージが混在しているが、それはどの国に行っても起こり得ることである、と認識しているようだ。日本の文化と人々のメンタリティが自国のものと異なるために敏感に反応し、「旅行好きの割に実際の社会のことを知らない」、「自分の国で何が起っているかさえ知らない」と思われる日本人学生に対して失望し、「日本人学生が世界に目を向けられないために個人的な見方しかできない」のではないかと残念に思う気持ちを語り、「内向きの社会」と「知らない」という項目を二つの否定的なイメージとして挙げられている。本来は日本人の美徳であるはずの「丁寧さ」が「本音と建前」の下に使われていることに遭遇し、日本人の本当の気持ちを見極めるのが困難だと語っている。日本人とは本音で語り、意見を出し合うことを強く望んでいるにも拘らず、本当の友人関係が築けないことが悲しいと述べている。生活面では、「金銭的な問題」「食べ物」のほか寮生活でのいくつかの【日常的な問題】を経験しながら、否定的なイメージの「オーガナイズすること」がうまくされていないことに対して、「観察や経験することからも何か得る

ことがある」とし、「全ての経験は自分を自立に導いてくれる、成長させてくれるもの」と自己成長の契機であると、前向きに捉えている。正に Alder (1975) の「自己崩壊」段階から「自己再統合」段階へ移行している過渡期にあると言える。また、日本人学生との人間関係で躓きを何回か経験したとのことであったが、2 回目の PAC 分析の面談後、それらの経験を面談によって客観的に整理することができてよかった、残りの留学生生活を次のステップに進めたいと前向きの姿勢を見せていた。

4.3 3 回目 留学終了直前の留学に対するイメージ

4.3.1 調査協力者 A による解釈

クラスター A (CL-A) 【being open-minded】

Acceptance (+), Being able to think more openly when I go back home (+)

「受入れること」。日本と自分の国は異なる部分が多くて、最初は受入れることが出来なかった。なぜなら、あまりに違うから。でも、これは自分で変えられない、むしろ自分が変わらなきゃならないと思った。そしてあるがまま受入れないといけなかった。勿論たくさん嫌なことがあるけれど、でももし受容することを学んだら、もっとここでの生活を楽しめるし、多くを学べると思った。今はもう怒りも感じないし、怒りもしない。ただ受入れた。何を受入れたかって？人々が世の中を「知らないこと」っていうのは大き過ぎるので、それを受け入れることは出来ない。日本是世界のことを知らなさ過ぎる。皆じゃないけれどほとんどの人が。ここが小さな地方都市だからかもしれないけれど、日本が抱えている問題、日本がもう少し世界に目を向けたら、【心を開いた】ら、日本人ももっと幸せになるのに、と思う。「受け入れた」というのは、あまり感情移入せず、怒らないということ。そして、時々自分から日本人の友達に文化についてなど尋ねたり、話すようにしたら、色々説明してくれるのね。第二次世界大戦前の日本と今は違って、人々はもっと人と交流するようになったはずでしょう？でもどうしてうまくできない？多分日本人のメンタリティが理由でこうなったかな、とずっと考えていたんだけど、でももうすぐ、自国に帰るでしょう？自分でも残りを楽しもうと思って。「帰国したらもっと寛容に考えることができる」と思う。自国で不平を言う人がいたら、自分の経験に関連付けて考えられるかな。自分の大学のコースの後輩にも自分の経験を話すことができるし。

クラスター B (CL-B) 【More positively looking ahead】

Thinking about the future (-), Became more wise with money (+)

留学前、留学のことだけを考えて、ただ勉強ばかりしてた。その留学も終わるでしょう？それで今、「将来について考える」んだけど、本当にまた日本に帰って来たいと思ってる。例えば日本で教えるということも考えている。家族のことも考えなきゃいけないけれど。日本では一人で住み、「お金のやりくりをうまくしなきゃ」いけなかったのは、わたしにとってとてもいい経験だった。自分の国では、家族に言えばなんでも用が足りたわけだけど、日本は物価が高いでしょう？食べもの、お金のこと、色々なことを自分で考えなければならなかった。お金の大切さもわかったように思う。【もっと前向きに将来を見る】つもり。

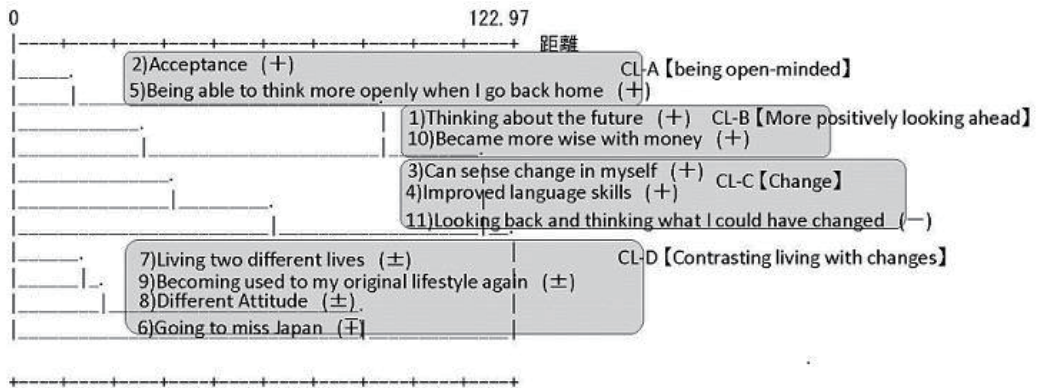


図 3-3 3 回目 留学終了直前の留学に対するイメージ

クラスター C (CL-C) 【Change】

- 3) Can sense change in my life (+), 4) Improved language skills (+),
11) Looking back and thinking what I could have changed (-)

周りにいる人によって、パーソナリティって【変わる】と思う。回りの人も変わり、私もある面で変わったと思う。前はあることを絶対こう、と思うほうだったけれど、ある部分日本人が考えるように考えるところもある。例えば、清潔さ。靴はいつも脱ぐようにするとか。自国に帰っても、日本でやっていたようにやろうと思ってる。ある意味「自分は変わった」と思う。はっきりと何かとはいえないのだけれど。「言語は上達した」と思う。もっと上達できたんじゃないかと思うけれどかなりできた。特に人と話すときに感じる。コミュニケーションが楽になったし、もっと早く理解できるようになった。理解できなかつたら嘘をつかずに「それってどういう意味？」と聞くようにしてる。「振り返り、自分がこう変わっていればよかったと思うこと」については、前のとリンクして言語についてだけではないのだけれど、もう少し、人々と交わるべきだったと思う。もし自分に話しかけてきてくれば、自分も一生懸命接したはず。来なければ放っていた。もう少し、落胆せずに、自分から話しに行けばよかったと思う。それは言語のためにも、何のためにも。でも、人の態度が時折嫌だった。例えば、何か約束していてもとても長い間楽しみにしていても、あっさりキャンセルする人がいたり。そんなこと誰だって嫌でしょう。キャンセルされたら次には約束をしない。よくダブルブッキングなども起こる、今でも。そんなことにまだ腹を立ててる。そんなこと好きな人はいないでしょう？ 自国では人はもっとゆとりを持って生きてる。自分も、他の人にも時間を与える。「オーガナイズすること」については、最後の最後まで手をつけずに放っている、という日本人の印象は全然変わっていないけど。

クラスター D (CL-D) 【Contrasting living with changes】

- 7) Living two different lives (±), 9) Becoming used to my lifestyle again (±),
8) Different Attitude (±), 6) Going to miss Japan (±)

二つの国を行ったり来たりするのは大変だけれど面白い。いずれの生活にもいいところがあるから【変化とともに二つの生活を比較】できる。混乱しているのではなくて、いずれかの生活に慣れてもう一つを「懐かしく思い出す」、「日本を懐かしくなる」と思う。「二つの人生を生きる」感じ。不安も少しあるかな。こちらの生活に慣れたので、戻ったらどうなるかな。私の友達もきっと生活が変

わっているはず。例えば私の態度、自分の他人に対する「態度も変わった」。日本では丁寧に接するけれど、自国にいるときはお互いに丁寧じゃなく、家族や友人たちも討論好きで少し攻撃的かな。でもその家族や友人たちとの「生活に戻らなければ」。日本に来た当初は恋人も出来て良かったんだけど、別れてからは気分も落ち込んで、自国をよく思い出していた。また同じことが自国に帰ると起こりそう。日本では付き合っていた相手が親友でもあったから、友達もなくて寂しかった。別れてからまもなく、とにかく日本人たちの態度が気になって、嫌だった。それが本当に自分の生活の大きい部分を占めてた。失恋して初めて相手の大きさを知るということもあるかな。それが人間。

クラスター間の比較と全体について

CL-A【心を開く】にあるように、いろいろなことを受入れ、もっとオープンに考えられるようになったら、他の人にも共感したりできる。そして心を開ける。そして、CL-B【もっと前向きに将来を見る】ことが可能となる。でもCL-C【変わる】にあるように、もちろん私は受入れているけれど、やはり日本人も「変わる」「変える」ことが必要。同じ日本人だったら、共感し合え、少しずつ世界を変えられると思う。皆が変えていきたいといったら、、、でも誰も手を挙げないだろうな。でも心を開けば何かを受入れることができる。人生で成功するって、例えば成長は変化無しには難しいと思う。変化することは必要なこと。CL-Dは、私自身のこと、変化もできたから、全く違う文化の二つの国だけれど、比較しながらどちらでも何とか生きていけるかな。

4.3.2 総合的解釈

一つの連想項目「振り返り、自分がこう変わっていけばよかったと思うこと」以外は全てが肯定的、または中立的なイメージとなっている。項目数は2回目に比べ減少したが、全体的に肯定的なイメージが増え、重要な項目として留学終了が近付いている時期であるため、1) 将来について考える、2) 受入れること、3) 自分の中で変化を感じる、が上位である。CL-A【心を開く】では「受入れること」の大切さが述べられ、「帰国しても心を開いて考えること」もできるであろうと考えている。相手のあるがまま受入れることで、留學生活を楽しめるし、多くを学べると言っている。しかし、全てを無条件に受け入れるわけではなく、「心を広く持ち、あまり感情移入せず、怒らないということ」が調査協力者の言う「受入れること」である。そして、自分から日本人の友人に質問を投げかけると答えてくれることが分かり、もう少し自分から積極的に働きかけておくべきだったとも述べている。CL-Bは帰国を目前に控え、帰国後のことを考えたり、お金の使い方にも慣れ【もっと前向きに将来を見る】と、自分の国と日本のどちらでも生きていけるように感じている。CL-Cでは【変わる】ことの重要性を述べている。容易に変わることはないと思っていた自分も心を開くように変化し、留学の目的の一つであった「言語」についても上達し、コミュニケーションの仕方も「変わった」と感じている。しかし、忙しきで約束を変更したりキャンセルしたりする日本人や、世界の動きに無頓着な日本人にも「変わる」べきだと提案している。また「変わる」ことが成長には不可欠だと強調している。最後のCL-D【変化とともに二つの生活を比較】では、自分も変化し、日本で生きていくことも将来の選択肢としながらも、家族の待つ母国へ帰ることを楽しみにし、いずれかの生活に慣れてもう一つを思い出しつつ、いずれの文化でも生きていく自信を得たと述べている。そして、留学の10カ月を振り返り、日本に来た当初は前向きであったが、数か月で恋人と別れてからは気分も落ち込み、母国をよく思い出しながら周囲の日本人たちの態度や言動が気になり自国の人々と比較しては批判的になっていたが、人を変えることはできないのだからそのま

ま受入れることで少しずつ自己成長し、留学生活を楽しめるようになってきたと、その変容を反省も含めながら客観的に捉えていた。そして自分の経験を出身大学の後輩、学生に知ってほしい、役立ててほしいと述べている。

4. 4 留学生Aの留学生活のイメージ

4. 4. 1 留学生Aの留学の意義と留学生活

これまでのPAC分析の結果を踏まえて、総合的に解釈する。まず、留学の意義について1回目の留学開始直後は、CL-Aに見られるように、留学から得られるものとして「新しい友達を作る」「新しい社会に飛び込む」「語学の習得」を挙げているがCL-Bにある「自立すること」も、Aにとって大きなテーマで開始時から連想項目に取り上げられていた。留学開始時の留学の目的として挙げられている項目では、「自立心を養う」が中立のイメージをもち、親から離れて暮らすことの不安があるものの、他の項目は全て肯定的なイメージである。その言語の文化圏に行くのが「言語を学ぶのにいい方法」だと述べ、意欲を見せている。しかし、2回目の留学半ばの段階では、「心を開くこと」「経験」「異なる意見」「文化差」で構成されるCL-Aが【経験や気づきから得るもの】として出されており、全て肯定的、または中立のイメージで、これが留学から得られるものと考えられる。この時期は語学力不足が一原因だと本人は認識しているが、日本人とのコミュニケーションが思うようには行かず、意見を自由に言い合う自文化とは異なり、意見を聞いても返ってこない、本音がなかなか聞けないゆえに拒絶されたような思いに駆られ、自分からも距離を置き、日本人全般に対し痛烈な批判を述べていた。Berry (1997)の文化変容方略の類型の「分離」(separation)とも言える状態であったかもしれない。また、この段階では、日本人の友人から直前の約束キャンセルやダブル・ブッキングされるなどの苦い経験や恋人との別れなどの挫折も経験している。それでも「困難さ」は【あなたの独立心】を育てるものだとポジティブに捉えようとしている。一方で自分が教えている英語のクラスに通う学生や海外経験を持つ友人たちが、他の「日本人」とは異なり、心の支えとなっている。1回目につき、「～しなきゃ」とポジティブに自分に言い聞かせる表現が頻繁に出てくるのもこの2回目の特徴である。カルチャー・ショック、または「適応不全」とも見られる経験を次に向けて、Alder (1975)がいうところの新しい「文化学習」の契機としていることが窺える。3回目の留学終了直前には、「残りは楽しく過ごしたい」と、それまでの自分の態度に区切りをつけ「違いを受入れる」ことを決め、「心を開く」ことを学び、そうすることによって共感することも可能になると述べている。そして、語学力の向上も幸いし、コミュニケーションが楽になってきたというが、ここでAは、コミュニケーションの大切さに気づき、自分から話しかけ質問していけば日本人は説明してくれることを改めて知り、批判的になるばかりではなく、自分も「変わる」ことが必要だと気づき、それが大きな学びだと言っている。さらに、留学生活で異なる文化での生活体験を経たからこそ、日本も将来働く場としての選択肢の一つであると言い、新しい文化圏を留学で知り得たことを幸運に思い、いずれの文化圏においても何とか生きていけそうだと明るく語っていた。異文化での経験は辛くもあり、それらを通して学びの多いものであったため、自国に戻って留学をしている学生が不満を持っていればそれを理解することもできるであろうし、自分の体験談を留学をしようとする後輩にも紹介し、「あるがままを受入れること」つまり、文化相対主義に立った上で共感することを伝えたいとのことである。

3回目の留学終了直前には、「変わる」「受入れること」というキーワードが頻繁に使われており、図1のBerry (1997)の類型で考えれば、「自文化保持」をしながらも、「認知」と「態度・

行動」レベルで異文化社会との関係保持をする「統合」(integration) に少し入った段階かと思われる。しかし、「情動」面では、ズレがあり、相手文化に共感するまでには至っていない。A の「受入れた」というのは、「あまり感情移入せず、怒らないということ」であり、問題に意図的に入り込まず、感情をコントロールし、態度や行動することを優先させる戦略が選択されたと言えよう。そうすることで、カルチャー・ショックを乗り越えるというより、むしろカルチャー・ショックに踏み込まず、これまで以上のショックによる影響を回避していると解釈できる。これには滞在期間が10か月と限られた期間であるがゆえに、留まって悩み続けるわけにもいかず、帰国後のこと、将来のことを考えざるを得ない事情もあるかと思われる。また、A が「パーソナリティって変わると思う」「私もある面で変わったと思う」の例として挙げているのが、「清潔さ、靴はいつも脱ぐようにするとか」であり、この表層的な変化では、パーソナリティなど深層部分の変化があったかどうか定かではない。これらの表層的な態度・行動面の変化があったからと言って、文化学習が起こっているとは言い難い点も考慮に入れなければならない。

4.4.2 留学生Aの異文化適応要因

留学前の適応要因 FDA (Berry 1997) の視点から見ると、留学生Aの欧米文化圏と日本では文化的距離は極めて遠いと言わざるを得ないが、日本語能力については、出身大学で留学前に日本語、及び日本事情を2年間学んでおり、留学は学位コースの一部に組み込まれており、親しい留学生仲間や家族からのサポートを得ながら、留学中に経済的にも生活面でも自立をすることを目指している点など、留学前の適応促進要因はある程度整っていたと言えよう。認知面の日本文化についての知識も事前に獲得しているはずであったが、表層的な知識の習得で、理解までには至っていなかったかと思われる。心理的な挑戦として「自立すること」「ホームシック」などの連想項目が留学開始直後からあり、「自国と日本の違いに慣れていかなきゃ」「最後には乗り越えられる」と個人の心理的な要因についても、環境面についても留学を前向きに捉えていた。家族と離れて生活することから感じる家族への感謝の気持ちはこの時期から留学終了直前まで続けて語られた。一方で、日本人に対しては「異なるメンタリティ」「異なる考えやライフスタイル」を持っていて「違う」と繰り返し述べているが、詳しく何がどう異なるか、何がそのように「違う」と言わせているのか、詳細は語られていないが、留学半ばには、「違う」ことを受入れるのではなく、寮でのトラブル、食べ物や金銭的な日常的な問題もさることながら、日本人との付き合いでの数回のトラブルなど、すべては文化や考え方の「違い」から来るものだとしている。日本人は「無知、世界で何が起きているか知らない、全く意見を持っていない、本音と建前があり本心が探れない、女の子はファッションの話ばかりだ」とステレオタイプ化し、「全ての日本人はこうだ」と判断を下している。留学生Aが人間関係で傷つきやすく、時には攻撃的であることが、適応遅滞要因となっていたかもしれない。ちょうどこの時期、留学生Aのチューターの切り替え時期でもあり、新しいチューターとまだ友人関係が築けておらず、同じ交換留学生仲間間で固まり、英語で話している姿がしばしば見られた。留学生間でストレスを共有することで、ストレスの軽減とつながっていたのではないかと思われる。それから徐々に日本人の中にも意見の交換が可能な本音で話せる仲間ができたことから、「残りの留学生活、頑張りたいと今実感している」「前に進まなきゃ」と自分を鼓舞するフレーズがよく聞かれた。日本人の英語クラスの学生や海外経験のある学生のソーシャル・サポートも適応促進要因であったと言えよう。

留学終了直前の3回目のインタビューでは、留学生Aの持つ「積極性」「留学体験を自己成

長に繋げようという姿勢」が幸いし、あるがまま「相手を受入れること」「帰国したらもっと寛容に考えることができる」ことを目標に、感情移入して批判的にならぬように「心を開くこと」を決め、残り少なくなった留学生生活を積極的に楽しもうとした。あるがままを「受入れること」で寛容になれ、学びが多いと言っている。これらが適応促進要因として働き、苦い経験にも一区切りがつき、留学生活の中で遅ればせながらこれらの態度・行動変容が非常に重要であったことが意識化できたと語っていた。ほかに「自分からコミュニケーションを試みた時、自分に詳しく説明してくれた」「理解できなければ自分から積極的に聞く」等の行動面の変化も自分で変わろうとする自己成長の努力の一端ではないかと思われる。10か月という留学期間も「残りを楽しまなくちゃ」という気持ちの切り替えを後押しした意味で、適応促進要因と考えられるのではないだろうか。

Alder (1975) が示した5段階のうち、留学当初には接触 (Contact) 段階であったものが、2回目の留学半ばでいろいろな挫折体験で「適応不全」とも言える状態を経ながらも留学終了直前には、自律 (Autonomy) の段階に達していると言えよう。自文化に戻ることが見えてきた段階で、改めて留学の意義を問い、自律への意識化が可能となったと言える。交換留学とは、10か月ないし1年の限られた期間の留学であるが、最後の段階で、自分から働き掛け、相手を理解する努力、相手に分かるような説明を行うこと、自分も変わるという意志などがコミュニケーションには重要であると気付くまでに至っていることは評価に値する。これが今後、再び異文化との接触があった場合に、相手文化のメンバーとの実際の相互作用まで発展すれば、単なる「変化」ではなく、Adler (1975) の言う、文化学習、自己成長へと繋がっていくに違いない。

5. おわりに

本稿においては、PAC分析を用いて、10か月滞在する在日交換留学生1名の留学に対するイメージ、異文化への適応のプロセスを考察した。留学開始時から留学半ば、そして留学終了直前まで、連想項目として頻繁に出されていたのは「自立をすること」「心を開くこと」であるが、それぞれが段階ごとにいろいろなイメージで捉えられており、時間経過に伴い、肯定的に考えられていたものが次の段階では否定的に、または中立的に捉えられている場合も、またその逆もある。留学生Aの場合、例として「言語」は重要順位は常に高いが、留学の目的として肯定的なイメージとしてスタートしていながら、それが留学半ばではコミュニケーションの障壁として捉えられ、終了時には、【変わる】中の1つの上達したスキルとして肯定的なイメージで出されており、同様の項目も時期によって全く異なる文脈で扱われているのが観察された。10か月という短い期間でありながら、物理的な問題を少しずつ乗り越え、「違う」ことに反発しながら心理的な困難さに苦しんだ時期を経て、最後には、「受け入れること」「変わること」で成長できると考えるようになり、周りや社会にもコミュニケーションを働きかけたり、二つの異なる文化圏で生きていくこともできそうだと将来への自信を得ていた。

正に交換留学が文化学習と自己成長の契機となっており、Adler や Berry のモデルに合致する異文化適応プロセスが示唆されたと言える。また、Aが述べていたのは、今回の調査でのインタビューが客観的に留学の意義を考える機会を提供しており、カウンセリングのような機能を持っていた点である。これは井上 (2001) が指摘する「クライアントの内面で問題への認識と自己理解と他者理解を深める道具」としてのPAC分析の特徴と一致する。今後、ケース分析を積むことによって、個々人にとっての留学の意義を分析・考察し、交換留学の推進と受入れ態勢の整備に役立てたい。

参考文献

- 安達一雄 (2002) 「外国人留学生の日本語能力と異文化適応について」『留学生教育』7、103-119.
- 岩男寿美子・萩原 滋 (1987) 『留学生が見た日本 10 年目の魅力と判断』サイマル出版.
- 井上孝代 (1997) 『留学生の発達援助－不適応の実態と対応－』多賀出版.
- 井上孝代 (2001) 『留学生の異文化間心理学－文化受容と援助の視点から』玉川大学出版局.
- 井上奈良彦 (2007) 「日本の国費留学生の異文化的適応－九州大学における複数の事例調査－」『Kyushu Communication Studies』5、61-74.
- 江淵一公 (1991) 「留学生の受け入れの政策と理念に関する一考察－主要国における政策動向の比較分析から」『大学論集広島大学大学教育研究センター紀要 20』33-68.
- 大野千里 (2002) 「在日留学生のアイデンティティと異文化適応の関係」『日本青年心理学会大会発表論文集』10、32-33.
- 葛 文綺 (1999) 「留学生の異文化適応に関する研究－来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に」『名古屋大学教育学部紀要 (心理学)』46、287-297.
- 末田清子 (2001) 「留学体験の意味づけ－大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して－」『異文化コミュニケーション』4、シータージャパン、57-74.
- 宋 愛芬・石川利江・神庭直子ほか (2006) 「在日中国系留学生の異文化適応におけるストレスとソーシャルサポートに関する研究」『桜美林論集』33、109-117
- 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要教育心理学科』36、139-147.
- 譚 紅艶・渡邊 勉・今野裕之 (2013) 「留学生におけるソーシャルサポート、対人信頼感、および心理的適応の関連」『目白大学心理学研究』9、53-63
- 田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応－ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から－」『広島大学教育心理学年報』37、143-152.
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャルスキル』ナカニシヤ出版.
- 湯 玉梅 (2004) 「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究：対日黄道上の困難の観点から－」『国際文化研究紀要』10、293-327.
- 土田義郎 (2009) 『PAC 分析支援ツール』<http://www.kanazawait.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (2014 年 10 月アクセス)
- 箕浦康子 (1990) 『異文化の中の子ども』東京大学出版会.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 改訂版－「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 中野祥子・奥西有理・田中共子 (2015) 「在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究の動向」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
- 新倉涼子 (2001) 「在日留学生の対人葛藤と解決ストラテジー－異文化間対人葛藤研究への一試案」『千葉大学留学生センター紀要』7、1-11.
- 文部科学省 (2016) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/01/08/1365889_1.pdf (2016 年 4 月 30 日アクセス)
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2007) 「日本語教育における PAC 分析の可能性と課題－読解教材を刺激とした留学生への実践研究から－」『日本語教育実践教育フォーラム報告』日本語教育学会、<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/maruyama.pdf> (2016 年 4 月 28 日ア

クセス)

- 山岸みどり (1995) 「異文化能力とその育成」『異文化接触の心理学』渡辺文夫編著. 川島書房. 201-219.
- 渡辺文夫 (1995) 「心理学的異文化接触研究の基礎」渡辺文夫 (編) 『異文化接触の心理学』川島書店. 79-97.
- Adler, P. S. (1975) The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Humanistic Psychology*, 15 (4).
- Berry, J.W. (1992) Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 69-85.
- Berry, J.W. (1997) Immigration, accultulation, and adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, 46 (1), 5-68.
- Redfield, R., Linton, R. & Herskovits, M.J. (1936) Memorandum on the study of acculturation. *American Anthropologist*, 38, 108-112.
- Kim, Y.Y. (1988) Preface. In Y.Y. Kim & W.B. Gudykunst (Eds). *Cross-cultural Adaptation: Current Approaches*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kim, Y.Y. (2001) *Becoming Intercultural: An integrative theory of communication and crosscultural adaptation*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Oberg, K. (1954) *Culture Shock*. Presented to the Women's Club of Rio de Janeiro, Brazil. 1-9.
- Ward, C. (1996) Acculturation In D.Landis & R. Bhagat (eds.) *Handbook of Intercultural Training*. Newbury Park: Sage. 124-147.
- Ward, C. (2001) The ABCs of acculturation. In D. Matsumoto (ed.) *The Handbook of Culture and Psychology*. New York: Oxford University Press. 411-445.
- Ward, C., Bochner, S.& Furnham, A. (2005) *The Psychology of Culture Shock*. London: Routledge.
- Ward, C. & Rana-Deuba, A. (1999) Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Crosscultural Psychology*, 30, 372-392.
- Zhou, Y., Jindal-Snape, D., Topping, K. & Todman, J. (2008) Theoretical models of culture shock and adaptation in international students in higher education. *Studies in Higher Education*, 33 (1), 63-75.